年の六月は此地に來りて、冷氣の强きに驚し事也、朝夕の寒さは、江戸上方筋の十月霜月の時候に同じ、尤年にも寄る事にや、海内狹しといへども、かくのごとし、中華をおもふべし、此邊の稻のうへやふ中國におなじ、米の生せる事三百坪に直し、四斗五升入五俵宛はありと、土人物語り也、俗にいふには、稻作は暑氣の强からざれば生せず、冷氣の地には至てあしき事にいへども、奥羽の二州寒國にて、米國なるを以て知るべし、土地によるものならずや、

〔東遊雜記六〕十七日（天明八年六月）長谷堂村出立、（三里餘）畑谷村休、山形止宿、御城主秋元攝津守侯六万石、城は平城にて、街道よりちら〳〵見ゆる計也、昔時は最上出羽守義光、家光、義俊居城にて、大いに繁茂せし所ゆへに、町の長サ壹里半餘、今は大に衰へて見苦敷町なり、端々に至ては、乞食小屋同前の家居なり、

〔東遊雜記七〕鶴が岡は、酒井侯（左衞門尉十四万石餘）の御城地にて、御城下なり、昔時は大寶寺の城と稱して、最上義光居城有し時に、初て鶴が岡と改名す、庄内といふも此地の事なり、酒井侯政事正しく、清川よりは、在々に至るまで民家のもやふ奇麗なり、富饒の百姓も數多見え、人足に出るものも衣服賤しからず、馬なども肥へふとり、かゝり美々敷、山川草木上々國の風土なり、十萬石も有なんと思ふ鄕中も見へ、これまで通行せし所々の及ぶ事にあらず、よき地の第一とおの〳〵評ばんせしなり、市中も寒國ゆへに板ぶき草ぶきの家居ながらも、會津の若松、二本松、白川、米澤何れも十万石餘の城下なれども、鶴が岡にくらべ見れば、大に勝劣あり、酒田の津へ遠からざれば、上方筋への便りもよく、海魚も高直ながらも自由なり、城は往來よりは委しく見へず、ちら〳〵見ゆる計なり、

〔東遊雜記九〕久保田は、昔時秋田城之助代々城主たりしに、今は佐竹侯の御城地にて、當主次郎侯と稱し、二十万五千八百石餘の諸侯にて、新羅義光の嫡流にして、諸侯の中にての歷家なり、（中略）